明治十六年の春父の七回忌に法会を行ひて

すこしも身にうつかぬ後の秋は
かへらぬ人のつゆそこほるゝ

中川 義孝

またふるねわかれし世に咲く花と
うつりゆく人にあはまほしさ

仝 泰孝

彼岸会の大人より年毎のかはらぬる
将の事人々を左に列ねて和歌

めくりし世の春のはなの色をしのふや
まことの花のさかりなれはや

服屋 伯雄

まちわひし世の春ならふれて
ことしはあまた神のつゆさ

仝 淳英

見し世のおもひ出ならむ梅のまゐ
ひとりとひぬるす峰の春陽

小野 弘

春柳むすへは玉をはふる庭
めくりし世をしのふ我ならすされ

堀江 宗秋

そなへし世の春の花のさかりを
むかしのもゆる法のつり

松本 清行

世にあらは世にさくらの花の色
手向にたむけはそなへしさ

平井 直之

まひしら花の色のへにして世をたに
むかしの人のかけも春なく

村島 忠一

はなの色も春の世の花ちらむ
むかしにまさる春をのこす

福居 隆実

こゝろなし世に桜の下露に
かゝみて立は春のおもかけ

平松 鶴嶺

桜なかりし法の袖ぬれて
たむけの法の花のかほりを

坂本 弘英

山吹のにほふ法のはなのやとに
ありし世の中のなかりき

三藤 顕遠

又から歌

生前相識情　今日刹於行
屈指七霜夢　春來使人驚

桐田 蒼陽

春去春來又値春　星移物變七霜辰
烏飛兎走無間隙　追慕故人思倍頻

池原 臥雲

以上

玉園